

ダンボール切つたり貼つたり破つたり殴つたりして
ゐる文化祭

小川真理子

高校の文化祭らしい。たぶん作者が勤務している高校の文化祭に取材したのでろう。ダンボールは、軽いし、加工しやすいので、看板から机や椅子にいたるまで大量に採用しているのだらう。「……殴つたりしてゐる」のユーモアが楽しい。

梅檀の大きな幹の間からアンリ・ルソーの絵のやうな雲

松本秀一

梅檀は「梅檀は双葉より芳し」と言われるように、姿かたちよりも香りで話題になることが多いが、ネットを見ると日本各地に梅檀の古木、巨木がかなりあるらしい。独特の幹の太さに、ルソーの雲が似合う気がする。

それぞれの夏の色して戻り来る一年二組朝顔の列

吉見恵美子

夏休み明けの小学校らしい。生徒たちの家で夏をすごした鉢植えの朝顔が、校庭に戻ってきたのだ。並んだ鉢それぞれの個性を表現した上句、うまい。

国東の山の彫像ゴームリーは鉄がからだで動かずに
いる

岩永芳人

一九五〇年生まれのイギリスの彫刻家アントニー・ゴームリーである。国東半島では毎年芸術祭が開かれてきて、いくつものアート作品があるなかで、ゴームリーだけをクローズアップして、特色を出している。

主役にも脇役にもなる我が家ではいつだって主役日
向のへべす

吉川七菜子

短歌の現在

No.500

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

第二句で切れる。一字あけるか読点を入れる方がいいだろう。「へべす」は宮崎県特産の柑橘類で「すだち」や「かぼす」の仲間である。大切にされていて、県外にはあまり出さないようにしているらしい。ところが、東京にはめったにないへべすの木がわが家に二本もあって、毎年何十個もの実をつける。牧水賞関係の席で、日向市長と同席した折、送ってくれることになったのである。この欄を書いていて、つい自慢したくなった。

ネットフリで逢った「東京物語」みたいな本を探すのが司書

片山佳代子

小津安二郎監督の「東京物語」は、一九五三年公開から、もう七〇年も昔の映画である。名前だけによく知られているので、作者はネットフリックスで「東京物語」を見たのだらう。そんな昔の埋もれた名作、現在では書名だけ知っていて手に入りにくい本を探す、そんな意味らしい。司書の仕事に取材した珍しい一首。

かき氷の切手を貼って出す手紙八月半ばのポストの赤さ

森屋めぐみ

昔の切手は、国立公園とか、歌川広重「月に雁」、菱川師宣「見返り美人」など定評のある名所、名画などが図柄になった。が、今はちがう。そんな今の切手事情を取り上げた点が新鮮。

台風を迎えるためについやしし時間の嵩を思っている
なり

梶尾利徳

今年は何度か大型台風が日本を通過し、線状降水帯なるものが各地に出現した。五島列島に在住する作者は、